

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32647

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463347

研究課題名(和文) 看護実践能力促進のためのキャリアプランニングに必要な教育の検証

研究課題名(英文) Verification of education necessary for career planning to promote nursing practical abilities

研究代表者

立石 和子 (Tateishi, Kazuko)

東京家政大学・看護学部・教授

研究者番号：80325472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：看護師のキャリアプランニングを明らかにすることを目的とした。今回は、認定看護師・専門看護師への選択の決定過程に注目し分析を行った。結果、専門看護師・認定看護師ともにキャリアアップの行動をとる動機づけとなったものは、「参加が目標をかなえるという期待」であった。そしてそこに「人生の過渡期」としての学修ニーズが生じると、潜在的な学習意欲が顕在化することとなり、学習はさらに動機づけられていた。次に、学習が動機づけられると、「他者との関わり」の中からの「情報」の取得、自分を高めたいという「成長志向性」、自分自身で主体的に対応しようとする「主体的対応力」などによって柔軟に対応していることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to clarify the career planning of nurses. Focusing on the decision-making process of certified nurses and certified nurse specialists, their processes were analyzed and the following results were acquired. The motivation to make decisions on career improvements was the expectation that the participation would meet their goals. And once given learning needs occurred during their life transitions, potential learning activities became clear and their learning activities were much motivated. Moreover, it was found out that this motivation encouraged them to acquire information through communication with others, led growth-oriented motives to improve their self-esteem and enabled them to respond flexibility with their intentions.

研究分野：看護教育、成人看護学

キーワード：看護学教育 キャリア教育 コンピテンシー 看護の専門性 高等教育論 ライフインタビュー

1. 研究開始当初の背景

申請者らは、欧州委員会「社会学的・経済学的重点研究」“Higher Education and Graduate Employment in Europe” (通称 CHEERS 研究) (日本代表：吉本圭一) で考案されたコンピテンシー項目、2004～2006年に van der Velden を研究代表者とする欧州委員会「重点的研究プロジェクト」“The Flexible Professional in the Knowledge Society” (通称 REFLEX 研究) を基盤とした、看護師の獲得能力と職務上の必要能力についてコンピテンシー項目(3領域、37項目)を作成しアンケート調査を実施した。この縦断的調査の対象は、「看護系大学在学学生および総合病院勤務の看護師」であった。結果、各時点(大学実習前から卒業後10年後まで)における看護師の獲得能力の総合的自己評価は経験とともに上昇していることが明らかとなった。

また別の視点より、日欧の大卒看護師教育課程の比較を行い、日本の看護師の特徴を明らかとすることができた。日本の教育課程では、【学問的な理論や概念枠組み】、【講義】が重要視されていた。次にコンピテンシーについては、欧州に比べ日本では獲得能力がすべて低い結果となり、反対に必要な能力は日本が高い結果となった。そして、大学教育の活用状況については、【職場で学習遂行】、【将来のキャリアを展望】、【人格の発達】で、日本が有意に低い結果となった ($p < 0.001$)。これらの結果より、日本看護教育の課題として、今後のキャリアに繋がる教育が求められると考えられた。

これまでの研究により、大卒看護師に必要なコンピテンシーは徐々に解明されつつある。しかし、日欧の比較を行った申請者らの研究結果からも、獲得したコンピテンシーを活用すべき方法論が未だ解明されておらず、さらに、日本の看護基礎教育課程に不足している部分である「キャリア教育」、すなわちキャリアプランニングの点に注目した基礎的研究を行い、その応用に繋がるよう発展させたいと考える。

2. 研究の目的

本研究は、申請者らのこれまでの助成研究において明らかとした大卒看護師のコンピテンシー獲得状況およびチーム医療の中でのエンプロイアビリティをキーとして、キャリア教育の一貫として未だ解明されていない基礎的諸問題を解決し、キャリア教育としての基礎看護教育システムを展開するための研究基盤を確立し、さらにその応用へと展開することを目的とした。

看護師のコンピテンシーの獲得能力とキャリア形成の関連性(看護の独自性)

看護系大学における学術型教育と職業型教育の学位と資格の体系化に向けての枠組みの検討

新人看護師の研修制度に必要な基礎看護

教育システムモデルの構築

3. 研究の方法

これまでの研究「看護師に要求されるコンピテンシー項目」を再分析し、キャリア形成の要素抽出のためにインタビュー調査を実施した。インタビューの内容は、看護師になった動機ならび対象科を選択した理由と看護経験、認定看護師課程または専門看護師課程に進学するきっかけや課程での学び、認定看護師、または専門看護師としての活動、印象に残った場面等である。得られたデータは逐語録を作成後精読し、内容全体の理解と解釈に努めた。逐語録から、認定看護師または専門看護師を目指した理由、経験した内容とその意味について質的帰納的に分析した。

倫理的配慮：研究参加者へ研究の趣旨、研究参加の自由意思、匿名性、結果の公表を口頭・書面にて説明し、書面で同意を得た。本研究は研究者らが所属する大学(必要時、施設)の倫理審査委員会の承認を経て実施した。

4. 研究成果

研究対象者：専門看護師10名(男性2名、女性8名)。専門分野：精神看護5名、慢性疾患看護3名、急性・重症患者看護1名、小児看護1名。認定看護師14名(男性6名、女性8名)。認定分野：集中ケア3名、手術看護2名、感染看護1名、小児救急看護1名、日本精神科看護協会認定7名。

注)専門看護師制度は、日本看護協会と日本看護系大学協議会と連携し運営されている。2017年現在、特定されている分野は13分野、296名である。

認定看護師制度は、日本看護協会が運営している。2017年現在21分野が存在する(登録者数17,443名：2016年7月現在)。しかし、その中に精神看護領域に関連するもの認定看護師制度は見られない。そのため、精神科認定看護師については、日本精神科看護協会が1995年に認定看護師制度を創設している。2017年現在700人以上の精神科認定看護師が登録をしている。

精神科の看護師とそれ以外の認定看護師、専門看護師に分けて分析を行った。

1) 精神における認定看護師・専門看護師

(1) 認定看護師

研究参加者は、日本精神科看護協会が認定したうつ病看護1名、精神科身体合併症看護1名、退院調整2名、行動制限最小化看護1名、精神科訪問看護1名、司法精神看護1名の計7名の認定看護師である(インタビュー調査当時の名称で現在は改変されている)。

認定看護師歴は平均6.4年(2～13年)、精神科経験は平均18.8年(12～30年)であった。最終学歴は大学院卒1名、大卒2名、短大卒1名、専門学校卒3名(准看護師から看護師への進学課程)であった。

看護基礎教育課程に進んだ理由は、看護師への興味・関心、近親者・教員からの勧めな

どであった。精神科を選択した理由は、実習で関心が深くなった、以前から精神科に興味があったという反面、特に理由はなかったが、精神科に配属されて関心が強くなったという人もいた。男性の中には男性看護師の存在も知らなかったという人もいた。認定看護師の存在についても同僚や医師の勧めで知ったという人もおり、認知度の差が大きかった。認定看護師を目指す理由として、〈精神科看護師としての問い〉では、患者のために知識・技術を身につけたい、精神科看護師としての成長への願いがあった。〈自己の人生とキャリアとしての問い〉では、今までやってきたことへの振り返りがあり、自分の人生と精神科看護のキャリアを強く結びつける動機が見えた。〈職場の改革〉では、現状への不満、不全感があり、職場の変革を望んでいた。認定後は、職場の期待に応え、組織で活躍する場を得る場合もあれば、組織で認められずにやりたいことができず葛藤している姿もあり、自ら訪問看護ステーションを立ち上げるといった道を選択する人もいた。

(2) 精神専門看護師

研究参加者は、日本看護協会が認定した精神専門看護師5名である。専門看護師歴は平均5.4年(2~10年)、精神科経験は平均12.2年(8~16年)であった。精神科以外の看護経験は平均2.2年(0~5年)であった。看護師の資格は、短大あるいは大学で取得していた。最終学歴は大学院の専門看護師コースである。

看護基礎教育課程に進んだ理由は、看護師への興味・関心、近親者・教員からの勧め、国際協力参加のためなどであった。精神科を選択した理由は、以前から精神科に興味があった、実習で興味・関心が深くなった、まずは心を学ぶことが大事だと思ったということが挙げられた。5名中2名は、精神科に興味があったが、まずは身体の看護を経験したほうがよいという周囲のアドバイスに従っている。しかし、もともと精神科に興味があるため、3年間、精神科以外の科で勤務した後に単科の精神科病院に異動している。

専門看護師を目指す理由として、〈学生時代からの希望〉があり、大学での授業や友人との話題が影響していた。看護の勉強が好きであり、さらに精神科の勉強が好きであり、向学心が旺盛である。精神科以外の病棟で勤務していても精神科の学習会に参加するような熱意がある。〈周囲からの誘い〉では、先輩看護師や大学教員からの勉強会の紹介や大学院への紹介があり、タイムリーに参加し断らない。専門看護師になることを学生の時から決めていたり、なればよいなど漠然とした思いを持っており、早い段階(看護基礎教育課程卒業後平均5.2年)で大学院に進むという特徴がみられた。〈リエゾンナースになりたい〉では、身体科での経験から希望していた。インフォームドコンセントなど倫理面の意識が高かった。〈精神科看護の改革〉

を意識し、患者のため、精神科看護全体のためという意識を持って臨んでいた。

実際の活動では組織を意識した活動や、精神科看護師の自立を意識した活動をしており、専門看護師として何をすべきか常に自分に問いかけながら実践している姿があった。それを病院の中でどのように理解されているのか、評価されているのか自分たちもよくわからないまま課題を感じながら職務を遂行していた。

2) その他の分野の認定看護師・専門看護師

(1) 認定看護師

認定看護師歴は平均5.4年(1~16年)、看護師経験は平均14.1年(9~21年)であった。最終学歴は大卒4名、短大卒1名、専門学校卒2名であった。

看護基礎教育課程に進んだ動機は、看護師という職業への興味・関心を持った時に、教師や家族といった周囲からの勧めなどにより進学先が決定されていた。ところが、看護師基礎教育課程を卒業した時点では、対象者のうち5名は何らかの形でその次の段階のキャリアを意識しており、認定看護師課程への進学の動機は、〈自己成長〉への期待と〈タイミング〉であった。この時、教育期間が半年であること、看護実践を続けたい、現場志向などの理由から認定看護師課程を選択していた。

そして、認定看護師としての学びは、その後の活動において、〈学習意欲の向上〉、〈主体的な活動〉、〈対人関係性への礎〉となつて活用されていた。また、それまでは、受け身であった日々の業務に関しても、認定看護師課程での学びを他者へ還元することを主体とし、専門性を生かした学習会の運営など、それぞれの持てる力を発揮していた。そして、さらなる次のキャリア大学院進学を目指している者もいた。

(2) 専門看護師

専門看護師歴は平均2.2年(1~4年)、看護師経験は平均19年(10~27年)であった。看護師の資格は、短大あるいは大学で取得していた。1名は、専攻科卒業後、学士を得るために他の学部を卒業し大学院へ進学したものもいた。最終学歴は大学院の専門看護師コースである。

看護基礎教育課程に進んだ理由は、看護師への興味・関心、近親者・教員からの勧めなどであった。専門看護師を選択した理由は、より専門的な分野を学びたくなつたということが挙げられた。

専門看護師を目指す理由として、〈学生時代からの希望〉があり、大学での授業や友人との話題が影響していた。看護の勉強が好きであり、さらに当該分野の勉強が好きであり、向学心が旺盛である。〈周囲からの誘い〉では、先輩看護師や大学教員からの勉強会の紹介や大学院への紹介があった。専門看護師になることを学生の時から決めていた

り、なればいいなと漠然とした思いを持っていたが、実際、大学院に行くまでには比較的時間を要していた。特徴的だったものは、専門看護師になるために、大学院への進学を希望したが、専攻科卒業だったために、進学できず、大学への進学（通信教育）からスタートし、専門看護師になるまでに、7年時間を費やしたのもいた。

実際の活動では組織を意識した活動や、各分野における看護師の自立を意識した活動をしており、専門看護師として何をすべきか常に自分に問いかけながら実践している姿があった。それを病院の中でどのように理解されているのか、評価されているのか自分たちもよくわからないまま課題を感じながら職務を遂行していた。今回、インタビューしたものは、経験年数が、浅かったため活動をどのようにしていったらよいか迷っていた。

3) 看護系大学における学術型教育と職業型教育の学位と資格の体系化に向けての枠組みの検討

認定看護師のキャリアプランニングとしての特徴は、最初から目指しているというよりも、実践の中で目指していくパターンが多いようである。精神科看護の場合、精神科臨床の長い実践の中で自分のキャリアを振り返ったり、自己実現を目指すというものであった。最初は、認定看護師の存在さえ知らなかったのであるが、学習を進めるうちに自分の目指すものが、だんだん明確になっていた。その中で自分が変わり、他の人も巻き込んで変わっていくというものであった。認定看護師は、エキスパートであるため他への影響が直接的でわかりやすく、ロールモデルとなることで病棟への影響は大きいと思われる。自らがリーダーとなっていき、周囲への協力も受けやすい。今回の精神科看護師の調査時点では、うつ病看護、身体合併症看護など部門が分かれていたが実際の活動は、専門だけではなく多岐にわたっていた。それは本人が望むに限らず病院の求めに応じた活動を実践しており、その活動内容が専門を取り扱った現在の精神科認定看護師のシステムになっている。

一方、精神専門看護師は、看護基礎教育の教育課程の影響と思われるが、学生のうちから専門看護師の存在を知っており、自分も活躍したいという気持ちを持っていた。職務内容を把握しているわけではないが、専門看護師が看護の質向上に役立っていることは理解しており、向上心が非常に高いという特徴がある。入職時から学習会の参加があり、意欲、意識が高く、臨床の経験が少なくても、早い段階での大学院進学を果たしている。今回の調査対象の認定看護師は、現場のことを熟知し、もっとよくしたい、もっと知識をつけたいという現実的な学びがあった。専門看護師は資格を得てからの学びが大きいようで、専門看護師として組織での役割、評価を

考え、管理職にも理解されえないような孤独を感じながら職務に当たっていた。

このように、リカレント教育としての認定看護師課程に進学したきっかけは、「参加が目標をかなえるという期待」であった。そしてそこに「人生の過渡期」としての学修ニーズが生じると、潜在的な学習意欲が顕在化することとなり、学習はさらに動機づけられていた。その一方で、学習が動機づけられると、同時にリカレント教育に対する様々な「阻害」に直面することとなる。阻害因子としては、職場の人間関係、経験年数、年齢的な順序性などであった。その際の対処方法として、「他者との関わり」の中からの「情報」の取得、自分を高めたいという「成長志向性」、自分自身で主体的に対応しようとする「主体的対応力」などによって「阻害」に応じて柔軟に対応していた。専門看護師の場合は、大学院進学であるために、一度、勤務していた職場を退職し、専門看護師として同じ職場に戻ったもの、他の職場へ変わったものといういるであった。

いずれのキャリアもそれぞれの役割があるが、自分が何をしたいのか、しっかり熟知し進むことが重要である。学生や新人看護師は、職務内容がよくわからずに認定看護師、専門看護師と口にしてはいるが職務内容を十分に理解する必要がある。その一つとして、看護基礎教育の段階でのキャリア教育は重要である。また看護職としての人生の中でキャリアプランニングという考えも早い段階で一考することが勧められる。

参考文献：Cross, K.P., 1981, Adults as Learners: Increasing Participation and Facilitating Learning, San Francisco

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計20件)

1. 立石和子、中澤洋子、原珠美、松尾良子、佐々木聖子、成人看護学実習において修得されたコンピテンシーの自己評価、北海道文教大学紀要、37、2013、p177-188(査読有)

2. 片倉裕子、長多好恵、立石和子、臨地実習における看護学生の感染予防管理の実態、北海道文教大学紀要、37、2013、p85-96(査読有)

3. An Investigation of the Basic Education of Japanese Nurses: Comparison of Competency with European Nurses, Kazuko Tateishi, Taro Matsubayashi, Keiichi Yoshimoto, Takanobu Sakemi, Nurse Education Today, 33(5), 2013, p 552-557(査読有)

4. 前田由紀子、石田佳奈子、梶原江美、岩本テルヨ、看護系大学における異学年交流授業の教育効果に関する検討、西南女学院大学紀要、18、2014、p21-31(査読有)

5. 酒井明子、中井佳代子、三澤琴美、川原宜子、谷岸悦子、清水誉子、緊急レポート日

本災害看護学会ネットワーク活動における看護ニーズ調査 - 平成 24 年活動報告と 25 年継続報告 -、日本災害看護学会誌、15(2)、2013、p83-86 (査読有)

6. 松尾綾、前田由紀子、レジリエンスと問題解決に向けた行動特性との関連：看護大学生のインタビューからの比較検討、西南女学院大学紀要、19、2015、p27-3 (査読有)

7. 前田周二、前田由紀子、松尾綾、看護系大学における異学年交流授業の教育効果に関する検討：基礎学習演習ゼミにおける課題解決型学習を通して、西南女学院大学紀要、2014、p23-31 (査読有)

8. 立石和子、谷岸悦子、前田由紀子、松林太朗、臨床で求められている新人看護師のエンプロイアビリティ：看護管理者へのインタビューを通して、東京家政大学研究紀要 2 自然科学、56、2016、p87-94 (査読有)

9. 松尾綾、前田由紀子、精神看護学実習における看護学生が共感性を獲得するプロセス：教員の介入を中心にして、日本看護学会論文集 精神看護 46、2016、p291-294 (査読有)

10. 今留忍、谷岸悦子、中里萌、医療機関における患者サービスとしての“様呼称”に関する文献考察、東京家政大学研究紀要 1 人社会科学、55(1)、2015、p123-129 (査読有)

11. Matsubayashi T, Tateishi K,

Tanigishi E, Maeda Y,

Current problems that are caused by a variety of diverse nursing education course in Japan, 九州大学教育社会学研究集録 17, 2016, p15-23, (査読有)

12. 立石和子、谷岸悦子、前田由紀子、松林太朗、臨床で求められている新人看護師のエンプロイアビリティ：看護管理者へのインタビューを通して、東京家政大学研究紀要 2 自然科学 56、2016、p87-94 (査読有)

13. 立石和子、有澤舞、太田美帆、西久保秀子、体験的学習による周手術期看護に関わる学習の工夫、教育改革推進(学長裁量)経費予算成果報告書 1、2016、p23-29(査読無)

14. 有澤舞、立石和子、太田美帆、西久保秀子、村上希、装着型ストーマモデルを用いた体験的演習による学生の学び～成人看護学演習レポートの分析～、東京家政大学研究紀要 自然科学 57、2016、p35-41 (査読有)

15. 前田由紀子、松尾綾、精神科における大学卒業新人看護師が求める能力と獲得課程 入職後 1 年間のインタビュー結果から、日本看護学会論文集 精神看護 47、2017、p131-134 (査読有)

16. 松尾綾、前田由紀子、臨地実習における看護学生の共感性、道徳的感性、自尊感情に関する研究、西南女学院大学紀要 21、2017、p23-37 (査読有)

17. 小原真理子、前田久美子、小林洋子、根岸京子、谷岸悦子、赤十字災害看護の特性を生かした災害看護の専門的看護育成プログラムの開発、学校法人日本赤十字学園 平成

26 年度「赤十字と看護・介護に関する研究」助成金報告書、2017、p10-15 (査読無)

18. 立石和子、医療系教育尾養成課程の実状 日本における看護師養成課程の変遷 -、第三段階教育における職業教育のケーススタディ 吉本圭一編(九州大学第三段階教育センター)、2016、p69-76 (査読無)

{学会発表}(計 29 件)

1. 尾山とし子、今井家子、谷岸悦子、小山真理子ほか 5 名、赤十字災害看護研究主催<災害看護>教育セミナーの実践報告、第 14 回日本赤十字看護学会学術集会、2013.6.23、日本赤十字秋田大学

2. 前田久美子、小原真理子、小林洋子、谷岸悦子、大和田恭子、日本赤十字看護学会災害看護活動委員会開催の「災害看護セミナーの」の評価と表題、第 14 回日本赤十字看護学会学術集会、2013.6.23、日本赤十字秋田大学

3. 立石和子、中澤洋子、臨地実習指導者の実習指導に関するリフレクション、第 23 回日本看護学教育学会、2013.08.07、仙台国際センター

4. Tateishi K, Matsubayashi T,

Nakazawa Y, Tanigishi E, A study of the Reflection on Instructions by Clinical Practice Instructors at a Hospital in Japan, 第 9 回 ICN (International Nursing Conference)(ソウル)2013.10.17、韓国(ソウル)(査読有)

5. Yukiko Maeda, Aya Matsuo, Meaning of Being Nursed by Nursing Students Long-term Inpatients of Psychiatry Tell, 3rd World Academy of Nursing Science, 2013.10.18、韓国(ソウル)

6. Aya Matsuo, Yuki Maeda, Examination of Resilience and Behavior Model to Solve Problems for Japanese, Science, 2013.10.18、韓国(ソウル)

7. 立石和子、中澤洋子、佐々木聖子、松林太朗、統合実習において認定看護師を通して学生がみた看護実践 学生レポートの分析より、第 33 回日本看護科学学会、2013.12.07、大阪国際会議場

8. 石ヶ森一枝、清野順子、立石和子、周手術期演習における学習定検の分析、日本看護学教育学会、2014.08.27、幕張メッセ・国際会議場

9. Tateishi K, Tanigishi E, Maeda Y (他 2 名), About the employability which Japanese hospital staff seek when hiring new nurses graduated from college? -Through the interviews with nursing managers, 14th ENDA & 4th WANS Congress, 2015.10.16, Hannover, Germany. (査読有)

10. Tijiiwa T, Maeda M, New User Experiences with Day Care for Persons with Psychiatric Disabilities during

Introductory Period 14th ENDA & 4th WANS Congress, 2015.10.16, Hannover, Germany. (査読有)

11. Maeda Y, Tateishi K, (他 2 名), Japanese Hospital Training Systems For New Nurses From The Perspective Of Competency: Interviews With Nursing Managers, ICN, 2015.06.22, 韓国ソウル (査読有)

12. Tanigishi E, Tateishi K, Maeda Y, Matsubayashi T, The Employability Which Japanese Psychiatric Hospital Staff Seek When Hiring New Nurses- Through Interviews With Nursing Practice Instructors, ICN, 2015.06.22, 韓国ソウル (査読有)

13. 佐藤綾, 前田由紀子, 精神看護実習における共感性の獲得プロセス 教員の介入を中心にして、第 46 回日本看護学会 精神看護、2015.09.18、大阪市

14. 前田由紀子, 松尾綾, 精神看護学実習における倫理に関する学生の認識、日本看護科学学会、2015.12.06、広島市

15. 前田由紀子, 松尾綾, 精神科新人看護師の現状と課題 入職後 3 か月と 6 か月の困難、医学看護学教育学会、2016.03.12、島根県出雲市

16. 立石和子, 谷岸悦子, 岩田みどり, 今留忍, 避難訓練にみる看護学生の防災・減災に対する意識に関する検討、日本看護教育学会、2015.08.19、徳島市

17. 有澤舞, 立石和子, 太田美帆, 山口佳子, 「形態機能学」の復習問題と学習効果に関わる評価、日本看護科学学会、2015.12.06、広島市

18. 今留忍, 谷岸悦子, 因子構造にみる看護学生のコミュニケーション能力の変改 領域別実習開始前と全課程実習終了後との比較、日本看護科学学会、2015.12.06、広島市

19. 齋藤正子, 谷岸悦子, 立石和子, 岩田みどり, 齋藤麻子, 災害中長期の健康支援活動 - 福島県原子力発電事故に影響を受けた園児と保護者 -、日本災害看護学会、2016.08.27、久留米シティープラザ(査読有)

20. 太田美帆, 立石和子, 西久保秀子, 有澤舞, 薄型ストーマモデルを用いた体験的演習による学生の学び 成人看護学演習レポートの分析、日本看護学教育学会、2016.08.18、京王プラザ

21. 有澤舞, 立石和子, 西久保秀子, 太田美帆, 体験的演習による周手術期に関わる学習の工夫、日本看護教育学会、2016.08.19

22. Tanigishi E, Saito M, Tateishi K, The Intervention In Lives of Children and Their Families Who Are Evacuating Because of the Fukushima Nuclear Accident “From the interviews with the parental guardians of children attending a kindergarten in Fukushima”, 世界災害看護

学会, 2016.09.28, インドネシア (査読有)
23. 鈴木幹子, 立石和子, 玄番千恵巳, 育児経験のある父親のコンピテンシーの構造、日本看護科学学会、2016.12.10、東京国際フォーラム

24. 松尾綾, 前田由紀子, 精神科における大卒新人看護師のニーズの検討 新人看護師とプリセプターへのインタビューより、日本精神保健看護学会、2016.07.03、滋賀県

25. 前田由紀子, 松尾綾, 精神科における大卒新人看護師が求める能力、日本看護学会 精神看護、2016.09.15、青森

26. 松尾綾, 前田由紀子, 看護学実習前後の看護学生の自尊感情と共感性の変化とその関連、日本看護科学学会、2016.12.09、東京国際フォーラム

27. 後藤有紀, 前田由紀子, 精神看護学実習前後における学生の倫理に関する思考、日本看護科学学会、2016.12.09、東京国際フォーラム

〔図書〕(計 1 件)

1. 研究代表: 小原真理子, 共同研究: 谷岸悦子ほか 3 名, 学校法人日本赤十字学園 平成 23 年度「赤十字と看護・介護に関する研究」助成報告書、伝承すべき赤十字災害看護に関する研究、2013、総ページ 187

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<https://nurseed-public.sharepoint.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者

立石 和子 (Tateishi Kazuko)

東京家政大学・看護学部・教授

研究者番号: 80325472

(2) 研究分担者

谷岸 悦子 (Tanigishi Ethuko)

東京家政大学・看護学部・准教授

研究者番号: 30248968

前田由紀子 (Maeda Yukiko)

西南女学院大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号: 10412769

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

三浦稚郁子 (Chikako Miura)

公益財団法人日本心臓血圧研究振興会

附属 榊原記念病院 看護部長